

立命電友会

21世紀に向けて 躍進する理工学部

立命館大学理工学部長

井上 和 夫（昭和三十三年卒）



立命館大学理工学部が京都・衣笠から滋賀県びわこ・くさつキャンパス（BK C）に移転し四年となりました。移転時には生物工学科、環境システム工学科、情報工学科を新設し、さらに昨年四月にロボティクス学科と、電気系学科として光工学科を増設しました。電友会会員となる電気系の学生

入学定員も、電気電子工学科が一四〇名、光工学科が一〇〇名で、毎年二四〇名の新入生を迎えることとなります。理工学部全体で云えば、学生入学定員は一三一〇名で、これは西日本の大学の理工学部では最大の規模です。

私は立命館大学理工学部電気工学科のOBですが、在学当時の理工学部は五学科で学生入学定員も四〇〇名弱、教員数で云えば、当時の電気工学科は教授、助教授、講師の先生方が八名おられました。現在は、電気系の教授、助教授、講師の人数は二六名です。

近年、大学の研究・教育レベルの高さは、その大学の大学院を見れば判るとも云われています。本学もBK Cに移転し大学院の改革を行い、学科によっては四〇%を

超える学生が大学院に進学しています。本学理工学研究科の大学院学生の人数は、私学では早稲田、慶応に次ぐものです。昨年には通産省工業技術院の電子総合技術研究所、大阪工業技術研究所と連携大学院の協定を締結いたしました。また、理工学部における文部省科学研究費の一九九六年度の採択件数は五二件、私立大学の理工系学部では早稲田・慶応に次いで第三位です。

びわこ・くさつキャンパスにおける研究施設としては、コンピュータ・ネットワークを含め充実した情報基盤や、我が国の大学では東京大学と本学のみ放射光施設（SR）があります。また通産省が米国のシンクタンクに依頼した大学の産学連携状況の調査では、我が国の大学の中で立命館大学が最も高い評価を受けています。その他、昨年には、産学連携実験棟の建設に通産省の大学への民生活適用第一号を得ました。

また、本学園は、大分県・別府市の協力により、新しいコンセプトの立命館アジア太平洋大学を一九九九年開学で目指しています。この大学は、学生入学定員八〇〇名の半数をアジア太平洋地域の留学生としています。この国際大学は、アジア太平洋の発展も含めて、国際社会で活躍しうる人材の養成であり、国内外からも期待されて

います。

これらに対する社会の評価のもと、十八歳人口が減少するにも拘わらず、入学志願者は増加し、大学全体では昨年、一昨年と一〇万名を超え、理工学部でも二万五千余名でありました。これも、立命館大学OBの皆様方、電友会会員の皆様方が全国各地でご活躍になつておられることの、フィードバックの結果であります。

ところで、私は立命館大学に奉職して、今年で三十一年になります。電気工学科に二十一年、新設された情報工学科に移籍して十年

です。これまでに思い出もしろありますが、とりわけ、二十八年前の大学紛争の時、広小路キャンパスと衣笠キャンパスがありましたが、衣笠では唯一電気工学科四号館が過激派学生により封鎖されたこと、その日のうちに一般学生の理解のもと封鎖を解除したことを、大南現総長が当時理工学部主事をされ、私が学生主事をしていて、学生寮の封鎖解除も含め、教授会、学生の対応にあたり、学園で教育・研究が通常に行えるように務めたことです。

私のこれまでの立命館大学での教育研究をふり返ってみますと、卒業研究の学生、また大学院学生に恵まれていたことです。大学紛争後数年は、大学院学生の厳選主義とか云って、各専攻に毎年数名

しか入学できなかった時代もありましたが、その頃も私の研究室には大学院学生が引き続いて入学していました。一九七二年に電気工学専攻に博士課程が設置されましたが、以来、研究室には博士課程学生が毎年在籍しています。課程を修了し博士の学位を取得した学生はこれ迄に十五名を数えますが、これらの卒業生は、国立研究所の主任研究員や国立・私立の大学で教授、助教授、講師として活躍しています。

我が国では十八歳人口の減少するなか、大学間とりわけ私立大学間の競争は厳しいものがあります。先日、週刊ダイヤモンドが、上場主要企業七二一社の人事部長からの十八項目のアンケート調査により、日本の国公私立大学について評価をしています。立命館大学は総合評価では十四位でありました。国立主要大学も含む中、この順位を高く思うか、低く思うかは別として、少なくとも私学の中では三指に入ることが目標であり、理工系学部に限れば、到達していると自負しています。

大学の教育・研究さらに文化活動、社会活動も含めて、大学の総合力を高め、さらに評価されるよう、微力ながら努力していきたく思っています。

新任のご挨拶

光工学科 森本朗裕

本年四月に光工学科に着任しました森本朗裕と申します。立命電友会会員の皆様、どうぞよろしく

お願いいたします。縁あって立命館大学の一員に加えていただくことになりましたが、四月に着任するまでほとんどびわこ・くさつ新キャンパスについては何も知らないでいたため、見るもの聞くものがすべて新しく、刺激的な毎日です。ごしております。

私は一九五三年に岡山県北部の津山市で生まれ、大学進学で大阪に出てきて以来、二十五年間を豊中市で過ごしました。立命館大学は私にとって人生で三番目の生活と仕事の場所になります。この三月までは大阪大学の基礎工学科というところにおりましたが、学生・職員の期間を通じて現在と同じく光工学科の濱川先生、高倉先生には大変お世話になりました。私の研究について少し紹介させていただきます。

光の大きな特長の一つに超高速性があります。私はこの光の持つ超高速性をいかに引き出して制御

するかを研究しており、ピコ秒からフェムト秒という時間領域を主な研究の対象にしています。

光が高速なことはよく知られた事実であり、そのことが光通信をはじめとするさまざまな光応用分野が開けている理由の一つではあります。ピコ秒さらにはフェムト秒領域という時間分野では応用が今やつと花開き始めつつあるところでです。

繰り返し周波数あるいは周波数帯域で言えばテラヘルツ領域になります。いうまでもなく光は電磁波であり、電波との違いはその周波数が非常に高くして数百テラヘルツからペタヘルツの領域にあることです。ピコ秒・フェムト秒といった短い時間幅を制御することとは、テラヘルツ以上の帯域を持つた光を生成して制御することにほかなりませんが、このために新しい光変調の技術を開発して応用しています。

学生時代のレーザーのモード同期からはじまって、新しい光変調器・偏向器の開発、スペクトル制

御による超高速光波形制御の研究を続けてきました。今でこそフェムト秒やテラヘルツが普通に使われる言葉になりましたが、私のやってきた研究は当時はどちらかというと世の中の主流とは少しはずれ、あまり人が手を出さない分野でしたので、その分常に新しい挑戦ができたと考えています。

今も研究については恩師である末田正先生、小林哲郎先生の影響を強く受けています。今後とも研究の方向を継続し、学生とともにあまり人のやっていない研究分野を開拓していきたいと考えています。

着任以来約一月がすぎましたが、この間の印象を少し述べさせていただきます。一言で言えばすべてにわたって「きれい」であり「整っている」ということです。

企業におられた方はこのような環境があたりまえだと思われるかもしれませんが、ゴミを所定の場所に出しさえすればすぐに回収される、研究室の掃除もしてもらえ、というの、国立大学にいたものにとつては少なからず驚かされるものがあります。

私たちにとつてネットワークは今やあたりまえのインフラストラクチャーですが、そのあたりまえのものが直ちに使えるという環境

を整えるのが、いかに大変であるかということはわかっているつもりです。こちらではそれがまさにあたりまえになっていることに驚かされます（これであとサーバーのレスポンスがもう少し速ければ言うことはありません）。事務方の対応はまさにプロと言えるでしょう。今までも私は学生の教育については力を入れてきたつもりではありますが、立命館ではこのこ

とについて私の考えていた以上に徹底されていることを知りました。「整っている」と申しましたが、残念ながら私の研究室についてはそうも言えません。真新しい学科の新しい研究室ですのまだ何もそろっていません。手探りで構築を始めたところです。これは私一人の力であることではありませんので、どうぞ皆様のご支援とご協力をお願いする次第です。

電子技術研究センター拠点

ハイテクリサーチセンター棟完成

電子技術センター長 辻村 寛

産官学共同による先端科学技術の中核施設として文部省から二分の一補助をうけ、昨年度十月から着工した「ハイテクリサーチセンター」の二階建て延べ床面積三千平米がこのほど完成した。現在、産官学交流事業はリエゾンオフィスを窓口として、SRセンターと理工学部各学科の専門分野をカバーする六つの研究センター群を中心に活発に展開され全国的にも注目をあびている。

これらの研究を支える拠点として、通産省の支援を受けて昨年度十月に完成した「産学連携ラボラ

トリー」と、既設のロボティクス・FAセンター、SRセンター等の研究施設を含めて延べ八千二百平米の研究棟が「テクノコンプレクス」と命名され、東門駐車場に隣接した位置に偉容を示している。これらの建設費については、二分の一相当額以上を企業ならびに卒業生有志による募金によっており、紙面を通じて改めて謝意を表したい。

「ハイテクリサーチセンター」は電子技術研究センターと環境技術関連施設が大半を占め、電気電子・光関連の研究室としては、情



報処理、光工学、電子レーザー、電子材料デバイス、電子機器制御、電磁遮蔽室等の各実験室の他に、内装は今後の計画となるが電波暗室百平米のスペースが確保されている。研究設備としては半導体材料の評価装置「カイス」と「MBE」装置、新しい原理による遠赤外線までの強力放射光を発生させる「光蓄積リング」等の大型装置が設置されており、また、屋上を利用した太陽光発電のシステムが今年度に計画されている。

電子技術研究センターには電気電子工学科と光工学科のほか情報学科の教員の一部も含めて三十余名が所属しており、取り扱う分野も大幅に広がっている。企業、および卒業生諸君の積極的な活用を期待している。

1996年度立命電友会収支決算報告

(1997年4月24日)

収入の部

(単位 円)

項 目	1996年度予算	1996年度決算	1997年度予算
前年度からの繰越金	7,152,497	7,152,497	8,176,332
終身会費納入(現金、総会当日他)	0	120,000	0
終身会費納入(郵便振替分)	100,000	1,950,000	900,000
終身会費納入(卒業・修了生)	1,000,000	840,000	1,000,000
雑収入	10,000	0	10,000
小 計	1,110,000	2,910,000	1,910,000
合 計	8,262,497	10,062,497	10,086,332

支出の部

(単位 円)

項 目	1996年度予算	1996年度決算	1997年度予算
事務用品	10,000	0	10,000
卒業記念祝賀会援助金	150,000	119,905	150,000
事務局人件費	500,000	425,000	400,000
通信費	500,000	733,169	740,000
(振込手数料)		(11,520)	
(切手および葉書)		(70,650)	
(会誌発送費)		(650,999)	
会誌等印刷費	500,000	456,290	450,000
会議会合費	300,000	141,501	140,000
二重払込者返金	100,000	0	0
慶弔費	30,000	10,300	10,000
小 計	2,090,000	1,886,165	1,900,000
次年度繰越金	6,172,497	8,176,332	8,186,332
合 計	8,262,497	10,062,497	10,086,332

(監査結果)

1996年度収支決算報告は、関連帳票との照合の結果、上記と相違ないことを認めました。

会計監事 栗路真博、前田稔夫

立 命 電 友 会 会 計 報 告

一九九六年度予算と決算ならびに一九九七年度予算計画（案）を前頁のとおり報告します。

一九九七年度の収入について、当該年度の卒業・修了生からの終身会費納入は約七十二％で良好な納入状況とは言えませんでした。一方、既卒業者からの納入は非常に好調で二〇七名に達しています。

これは、立命電友会に対する理解もさることながら、総会開催年度にあたったことと、会報発送時に未納入者に納入依頼を行ったことによるものと思われます。この結果、実収入合計は予算額を大きく

上回りました。

支出では、例年通り会報を二回発行したことによる通信費が大きく膨らみましたが、会費納入への反映が見られました。また、議会会合費には総会開催を見込んでいましたが、全学校友会との同日開催により意外に少なく収まりました。

結果として、単年度決算では黒字計上となり、会費納入にご協力いただいた卒業生の皆様に、この紙面をお借りしてお礼申し上げます。

電 気 電 子 学 系 便 り

電気電子学系長 寺 井 秀 一

教員の異動

次のような異動がありました。

(新任)

森 本 朗 裕

平成九年四月一日、大阪大学より、光工学科教授に着任。

平成九年度の電気電子学系の

主要な委員

学 系 長	寺 井 秀 一
副学系長	浮 田 宏 生
企画委員	名 西 愷 之
就職委員	津 田 川 勝
〃	北 澤 敏 秀
研究委員	北 澤 敏 秀
学生委員	今 井 茂
教務委員	高 倉 秀 行
〃	高 山 茂

平成八年度電気電子工学科

卒業生進学就職状況

平成九年三月に卒業した学生の進学就職状況は別紙の通りとなりました。平成八年度の求人数は、昨年の状況からは少し上向いた感があり、全国的な不況も底をつき、上昇きみのように見うけられました。卒業生にとっては、おそらく人生での「初めての選択」であり、迷ったり、悩んだりするのは当然の事であり、今後の人生を考え、各々に適した企業を選択するように就職指導を致しました。就職者数一三六名（学部六五名、院生七一名）の就職先は一〇〇社を超え、ほぼ卒業生の希望企業への就職を達成できました。修士課程への進学者は四七名（卒業生のほぼ四〇％）と高い進学率となり、博士後期課程への進学者は二名でありました。本年度も数多くの先輩の方々から就職のご依頼を受けましたが十分にご期待に沿えませんでした。大きな理由の一つとして、卒業生へのPR不足、企業内容が浸透しなかったことが上げられます。色々な機会を通じて、より身近かな企業イメージを定着させていただく必要があるかと存じます。

卒業、進学、就職等一覧

	卒業生	進学者	家業等	就職者
学部	119	47	7	65
修士	73	2	1	70
博士	1	0	0	1
合計	193	49	8	136

卒業記念祝賀会開催

一九九六年度の理工学部卒業式が三月二十一日に行われ、電気電子工学科の学部卒業生一一九名、大学院修了者七四名が卒業しました。

卒業式終了後、恒例の卒業記念祝賀会（電気電子学系主催、立命電友会後援）がびわこ・くさつキャンパス内のユニオンスクエアにおいて開催されました。

池田育弘電友会会長より祝辞を頂いた後、卒業・修了生、教員および立命電友会役員約二〇〇名のパーティにうつりました。

二時間程度の時間でしたが会場のあちこちで歓談の輪ができ、普段とは変わって盛装した卒業・修了生が互いに写真撮影するなど盛況の内に万歳三唱で終わりました。

同窓会だより

「立電30会」

同窓会——七年ぶりに開催

「立電30会」の名称で毎年開催を原則としてつづけてきた同窓会は諸般の事情により七年の空白期間を経て、去る四月十二日（土）京都市荒神口の鴨川沿いにあるKKR京都『くに荘』において、十八時より十一名の参加を得て開催された。

今回は、辻村寛名誉教授に御参加戴き、先生から学園の現状、とりわけBKC移転後の理工学部の展開について、そして在学中お世話になった諸先生との消息等を伺った。

七年ぶりということもあって、参加者からそれぞれ近況を語って戴いた。卒業後四十二年を経過した今日、既に定年退職をし、かねての念願であった構想を始動させている方、定年退職を目前にして今後を模索している方、現職をつづける方等様々であった。

先生を囲んだ歓談は終始和やかな雰囲気で行われた。一次会終了後同荘のラウンジへ席を移し、それぞれ自慢の喉を披露しあい二



立電四十一会報告

電気工学科四十一年卒の会を平成九年二月二十二日（土曜日）に京都駅烏丸中央口・西一〇〇m・ハトヤ瑞鳳閣に、雪がちらつくなか集合、PM三時過ぎから同窓生山下君の司会で始めました。まず辻村先生のご挨拶、次に前田先生の乾杯と続きました。立電四十一会は、毎年秋に開催してきましたが、第六回目、参加人数が少なく、一度、春に開いてはの意見があり決まりました。

しかし、平成八年に開く事が出来ず、今回の第七回も、十三名とふりませんでした。
鍋をつつきながら懇談の後、各人の近況報告と移り、五〇歳代は仕事で転機を迎えている方も多く、一人一人の報告時間が長く、質問も多く、予定時間をオーバーしました。

報告者 福田

昭和四十二年卒業生

三十周年記念同窓会報告

我々昭和四十二年卒業生は本年で卒業三十周年を迎え、去る五月三日、京都ホテルで三十周年記念同窓会を催しました。大学側から浦山、苅屋両先生、退職後の辻村、前田、松田の三先生、電友会代表で中西先生にも御参加を戴きました。同窓生の出席は四十四名で計五十名で盛会に開催する事が出来ました。二十周年記念同窓会にお越し戴いた山本先生、小原先生からは体調が思わしくなく欠席との事で、メッセージを頂きました。又大学の校友課の方からは発展した現在の立命館大学の資料を送付頂き、お祝いの電報まで頂戴し、感謝しております。更に現在は終

了まじかに、本日、仕事だった三人（内一人ご婦人）が駆けつけて参加、写真撮影後（ピンボケ）、これからの会の運営を如何すべきか検討、今回世話役を六人と増やし、人員増をもくろみましたが、残念ながら希望通りになりませんでした。結果は続けることが最優先、毎年開催することに決まり、PM七時前に次回の再会を約して散会しました。



ない者同士。趣味や部活や性格も含め、お互い共通項などおおよさない九人でしたが、何故か毎年一度、必ず集合すべく努めています。京都ばかりでは先生方にお気の毒、今年はひとつ『がんばろう神戸！有馬温泉で新年会！』と相成りました。仕事の都合で二名欠席でしたが、辻村、前田両先生を含め九名で今年もワイワイと歓談することが出来ました。

校『立命館大学』を心の拠り所にして充実した日々を過ごそうと誓い合い、次回の再会を期待して別れていきました。

記・代表幹事 南 能寿

昭和五十年卒業

有馬温泉で新年会

卒業以来二十一年間、振り返れば毎年欠かさず一泊で卒研の忘年会、または新年会を催してきました。卒研に集う前はほとんど知ら

辻村・前田研究室
橋本 和博

モーニン
グコーヒ
ーは六甲
山頂にて、
でありま
した。



昭和五十九年卒業

同窓会開催

平成九年四月十九日(土)午後五時より、京都河原町「すし松」にて卒業以来初めての全体会を開催した。関東や九州からの遠方から駆けつけた者も合わせて、参加者は三十三名であった。

最初に会の名称、幹事の選出などの意見を交換し、待ち遠しい懇親会を行った。乾杯と自己紹介を一人一人簡単に行った後、すしをつまみながらの歓談の時を過ごした。

懐かしい学生時代から現在にいたるまで、仕事や生活状況など話題は尽きることはなかった。二次会にも二十数名の参加があり、用意した会場は満席で大変な盛り上がりを見せた。

この度の出欠のやり取りの中で調査した連絡先をもとに、同窓会名簿を作成した。当日の参加者には資料として配布し、欠席者には個別に送付した。その際、同窓会の運営費のご負担をお願いしたところ、早速、十数名の方から郵便小為替を送付いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

次回の開催は来年二月中下旬に立命館大学びわこ・くさつキャン

パス近郊とし、その後二年毎に開催することとした。

幹事…赤尾、久保村、高山、渡邊

同窓会開催の予告

電気三十六年度卒

同窓会のご案内

本年は私たちが学窓を巣立って三十六年目に当たり、この十月に記念同窓会を開催する事に成りました。先生方より母校の近況についてお話し頂き、懇親会での久し振りに会った懐かしい友と旧交を温め、昔話にも花を咲かせたく思っています。是非万障お繰り合わせの上、ご参加下さる事を期待しています。

開催日 十月二十五日(土)

午後一時より

一時 立命館大学びわこ・くさつキャンパス集合

四時 石山瀬田川畔の料理旅館『船岩』にてあみ舟での「懇親会」

詳細は後日ハガキでご案内

(ご同伴大歓迎、宿泊も可。)

幹事…島貫、福井、平井

小林、廣瀬

事務局便り

立命電友会会報第九号発行にあたり、ご寄稿戴きました会員には、心より御礼を申し上げます。会報の発行も回を重ね、その内容の充実に努力をしまいましたが、第九号からは紙面の大きさをB5版からA4版にかえて、文字と挿入写真を見やすくして、ご愛読戴くようにいたしました。

会報発行の度にお願いをいたしておりますが、会員の住所および勤務先等の変更がございましたら、事務局までお手数ですがご一報下さいますようお願いいたします。その都度、校友会へも連絡をとり校友会名簿の充実を計ると共に会報等が会員まで確実に届けられるように努めてまいりたいと考えております。

同期会設立のご援助

立命電友会には同窓会を定期的で開催されておられる卒業生同期会があり、その会合開催ごとに本会誌にその様子を御寄稿いただいております。しかし、まだまだこのような活発な活動を行なっ

ているところは少ないのが現状であり、すべての卒業年度における同期会の結成とその活動促進が、本会の重要な課題とされております。

つきましては、未だ同期会を結成されていない年度の卒業生皆様方におきましては是非とも御結束を賜り、同窓会の開催を実現していただきたく存じます。本会と致しましては、同期卒業生の名簿の手配や会合準備に関わるさまざまな事柄に関しまして、御相談・ご協力させていただく所存であります。是非とも事務局まで御一報のほどお願いいたします。

※ ※ ※

今後共、電友会の運営には会員のご理解とご支援、ご協力の程をお願い申し上げます。

連絡先

〒五二五―七七

滋賀県草津市野路東一丁目の一

立命館大学理工学部電気電子学系内

立命電友会

電話 〇七七五―六一―二六六二

FAX 〇七七五―六一―二六六三

(題字は久保之俊氏)

